

# 高鍋藩八代絵師 安田李仲の住宅と庭の現況と そこにいたる過程からみた人と庭空間の関係

岡島直方

緑地環境情報学研究室

2009年10月7日受付; 2010年1月27日受理

**The building and garden of Richu VIII, process of  
change, and resident-garden space relationship**

**Naokata Okajima**

*Laboratory of Green Space and Environmental Information,  
Minami Kyushu University, Takanahe,  
Miyazaki 884-0003, Japan*

Received October 7, 2009; Accepted January 27, 2010

南九州大学研究報告 40A 別刷

*Reprinted from*

BULLETIN OF MINAMIKYUSHU UNIVERSITY  
40A, 2010

# 高鍋藩八代絵師 安田李仲の住宅と庭の現況と そこにいたる過程からみた人と庭空間の関係

岡島直方

緑地環境情報学研究室

2009年10月7日受付; 2010年1月27日受理

**The building and garden of Richu VIII, process of  
change, and resident-garden space relationship**

**Naokata Okajima**

*Laboratory of Green Space and Environmental Information,  
Minami Kyushu University, Takanabe,  
Miyazaki 884-0003, Japan*

Received October 7, 2009; Accepted January 27, 2010

**This paper first examines the house and garden of Richu VIII and the process of change from the original house and garden to the present. The discussion then addresses the relationship between the resident and the garden space. From Richu I to Richu VIII, the Yasuda family provided the painters for the Takanabe domain. This paper uses land surveys, literature and an interview for data. The original plan for the house that Richu VIII built in 1840 was L-shaped. The three other buildings on the site were the painter's studio, a shed for storing firewood and other items, and a structure for raising silkworms and weaving silk fabric. The main house is now a simple rectangular shape. A new building was constructed for tea ceremonies. The garden of Yasuda X had fruit and nut-bearing trees such as persimmons, pears, peaches and chestnuts. The garden was then for practical purposes in that residents could pick the fruits and nuts. The garden was also partially covered with thick weeds. Presently there are no weeds of such height and density as the current owner consistently weeds the garden. Both Yasuda X and the present owner, Ikuko Yasuda? the wife of Yasuda XI, were poets. For Yasuda X, this garden protected the workroom from the outer world; he could relax when seeing and walking through the garden. For Ikuko Yasuda—the garden needs constant care to eliminate the weeds and each of the plants has its own special nuance for writing poetry.**

**Key words: Richu VIII, samurai house, painter, poet, garden, Takanae-cho.**

## 1. はじめに

宮崎県児湯郡高鍋町は、「歴史と文教の町」として自らを対外的にアピールしているかつての城下町である。1587年から廃藩置県が実施される1871年まで、秋月家が藩主をつとめた土地である。この城下町の武士の住宅に関する研究としては、浅野<sup>1)</sup>による報告がある。それは住宅においてどの位置に座敷が配置されているかを調査したものである。一方1988年に発行された高鍋町の調査報告<sup>2)</sup>では、高鍋藩の武家屋敷9件についての保存状況がまとめられている。それらの建築年代ははっきりしないものが多い<sup>3)</sup>。その中で最も古い、

文化文政時代（1804–1829）に建てられたという黒水家住宅は高鍋町から有形文化財の指定を受けて一般公開されている。黒水家は高鍋藩の家老を勤めた家系でありその住宅は茅葺屋根で寄棟造りの建物である。現在は、近隣住民が見学者に対応している<sup>4)</sup>。本論では同書の中でその次に古いとされる安田家住宅における、住宅と庭の現況について調査を行う。安田家住宅敷地内の画室が建てられた時期について、前書<sup>2)</sup>では、秋月種徳公（1763–1808）がその画室の名前を「篁竹亭」（こうちくてい）と命名した文書が確認できたところから、180年以上前（2009年の現在からは200年以上前）にできた建物であろう、と推測している。

表1. 調査文献

文 献	書 名	筆者, 企画	出版社 発行者	出版年
1	歌集 尾鈴嶺 (おすずね)	安田 尚義	第二書房	1956
2	歌文集 虔々集 (けんけんしゅう)	安田 尚義	鉦脈社	1974
3	高鍋町の武家屋敷と民家		高鍋町教育委員会	1988
4	モスグリーン青春	安田 郁子	ジャブラン	1995
5	高鍋藩史話	安田 尚義	鉦脈社	1998
6	みやざきの百一人	宮崎県	宮崎県文化振興課	2000
7	白きマフラー	安田 郁子	鉦脈社	2005
8	門桜 (かどざくら) 歌集	安田 郁子	ジャブラン	2005

## 2. 本論の目的

高鍋町に現存する武家屋敷の中で古いものとして記されている (1) 安田家の住宅と庭の現況, その現況にいたる経緯などを明らかにすると同時に, (2) そこでの人と庭空間の関係を明らかにすることを目的とする。

## 3. 調査の方法

研究にあたっては, 安田家住宅と庭の現況に関して現地調査, ヒアリング調査, 文献調査を行った。調査は主として2009年7月から9月までのあいだに行った。現地調査においては, 住宅と庭の現況を平面図にまとめることができるよう光波測距儀による測量を行った。その際は敷地の概形と建築物の位置を測量し平面図にして, その上に樹木の位置を目測で描き込んだ。樹冠については樹木の足元で巻尺により長さを測った。これまでの住宅や庭での体験やそれらの物理的な変化について現在の家主とその家族へのヒアリング調査を, 直接または電話で10回以上行い, お話を聞かせていただいた<sup>5)</sup>。文献調査は, ヒアリング調査のうちに家主より紹介された関連文献をきっかけにして, 最終的に表1の書籍を用いて行った。なお以降の本文中では基本的に登場人物の敬称を略させていただく。

## 4. 調査結果

### (1) 対象敷地の環境と概略

安田家住宅は宮崎県児湯郡高鍋町上江にある。敷地は四方道路に囲まれており敷地境界部分は石垣と木塀で囲まれている (写真1)<sup>6)</sup>。敷地南側には門があり, 門から住宅の玄関へは蛇行した園路によって導いている (写真2)。敷地の中央部には東西方向に瓦葺の木造住宅がある。南面道路を隔てた南側に田を所有している (写真3)。その南面道路を西に250m行くと金比羅神社のある山がある。その山の手前部分は南北に農地がある (写真4)。敷地外部の北側と東側は住宅地である。敷地内部西側に比較的新しい建物が南北方向に建っている。敷地中央部の住宅の建設時期は, 町の報告

書<sup>2)</sup>に記述がない。記述があったのは, 同敷地南東隅にあった江戸時代の画室の写真と平面図であるが, その写真と同じ画室の建物は現存していない。敷地内の北西隅には菅原道真を祀った祠がある。敷地内北側の開けた空間には自動車が停められるようになっている。住宅南のタイサンボクとサクラのすぐ南に, 歌碑が立っている<sup>7)</sup> (写真5)。その西には井戸がある。現地調査により把握した敷地の現況を図1に示す。それぞれの写真を撮った場所とカメラの方向を図2として示す。

### (2) 安田家の歴史概略

1667年, 高鍋藩二代目秋月種春が当地を治めていた時期に, 高鍋に初代安田李仲がやってきた。当時, 狩野探幽 (1602-74) の弟の狩野尚信に師事していた, 絵師であり僧でもあった安田利左エ門義成 (初代安田李仲) は秋月公によりこの地に招かれたのである。高鍋藩三代目秋月種信のときに現在の場所に屋敷, 知行を与えられ定着することになった。ヒアリング調査によれば, 図1の敷地中央の住宅が建てられたのは1840年 (天保10年) である。この住宅は八代李仲 (安田守世) の頃に建てられたものであるということである<sup>8)</sup>。安田家は代々絵師の家系であった。八代李仲は, 15歳から20歳までの5年間江戸で狩野探龍に師事して画を学んでおり江戸での生活経験があった。そのため, 藩主秋月種樹 (たねたつ) が, 外様大名の一人として幕府より若年寄を命じられ江戸に向かうことになった折, 江戸へと召喚されたことがある。八代李仲は高鍋町の隣町の木城町比木神社の渡殿の天井に生き竜の絵を描いた絵師である<sup>9)</sup>。安田家の絵師としての家業の継承は八代目守世の代で終わる。その後九代目, 十代目となる。十代目 (安田尚義, 1884-1974) は歌人となった。現在は十二代目の世代に至っている。

### (3) 敷地内の建物位置の移動など

位置が変わったり, 取り壊されたりした建物があるので, それらをまとめ図3として概略を図示する。この図の中では中央の東西方向の建物が現在残っている最も古い住宅部分である。図4は, 江戸時代に建てられた画室「篁竹亭」の平面図である<sup>10)</sup>。秋月種徳公は当時この画室へは一年に二回ほど訪問したらしい<sup>11)</sup>。通りからすぐの中に入ることができるように敷地の南東の隅に建てられていたとのことである。図4の平面



写真1. 敷地東側 石垣（江戸期）と木の堀  
(2009年8月24日撮影)



写真3. 敷地南側 前景  
(2009年8月12日撮影)



写真2. 敷地南側の門近辺（入口の門に旧画室の梁を使用）  
(2009年12月16日撮影) 正面積み石+600からマキ樹高7.6mが生える



写真4. 金比羅神社の参道から見た対象敷地  
(2009年12月23日撮影)

図は図3-2の時代の画室の向きである。もともとは図3-1のように画室は90度左側に回転させた状態の向き、つまり土間の入り口が東側の道路に面する向きで、敷地の東南隅に存していた。画室は五代安田李仲（義門）が建てたものである。八代目秋月種徳より「篁竹亭」と命名された文書が義門に届けられていたことから推測すれば、おそらくこの室の周りには竹が生えていたのでであろうと高鍋町の報告書は述べている<sup>2)</sup>。図3-1のように居宅の平面は当初は、鍵の手型（L字型）をしており、南端に風呂や蔵が存していたが、災害により取り壊された。当初居宅の西側に薪屋があったが町の報告書ができた1988年の時点ではなくなっていた。また図3-1に示した通り安田家九代目のときには養蚕を行う場所があった<sup>12)</sup>。十一代目の捨男が現在の居宅の北側に建物を建設する予定を立てたが、尚義が1974年に他界したためとりやめになった。その代わりに本宅部分の修理を行った<sup>13)</sup>。江戸時代の画室「篁竹亭」は現在取り壊されている。その古い画室の構造材であった柱と梁が、敷地の門の材料として使われている（写真2を参照）。この門は2000年頃作られたと考えられる<sup>14)</sup>。かつて画室「篁竹亭」のあった敷地南東隅には現在イ

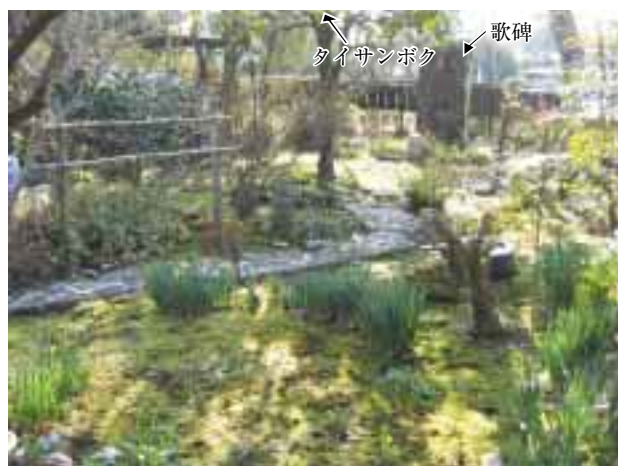


写真5. 歌碑の方を眺める  
(2009年12月23日撮影)

チョウが植えられている<sup>15)</sup>。現在のイチョウの樹高はおよそ8mである。図1の住宅の西側に南北に長い建物があるが、それはあたらしく建てられた茶室兼ゲストハウスである。この建物内部の南に設置された4畳半の茶室を現在では「篁竹亭」と呼んでいる。その茶室

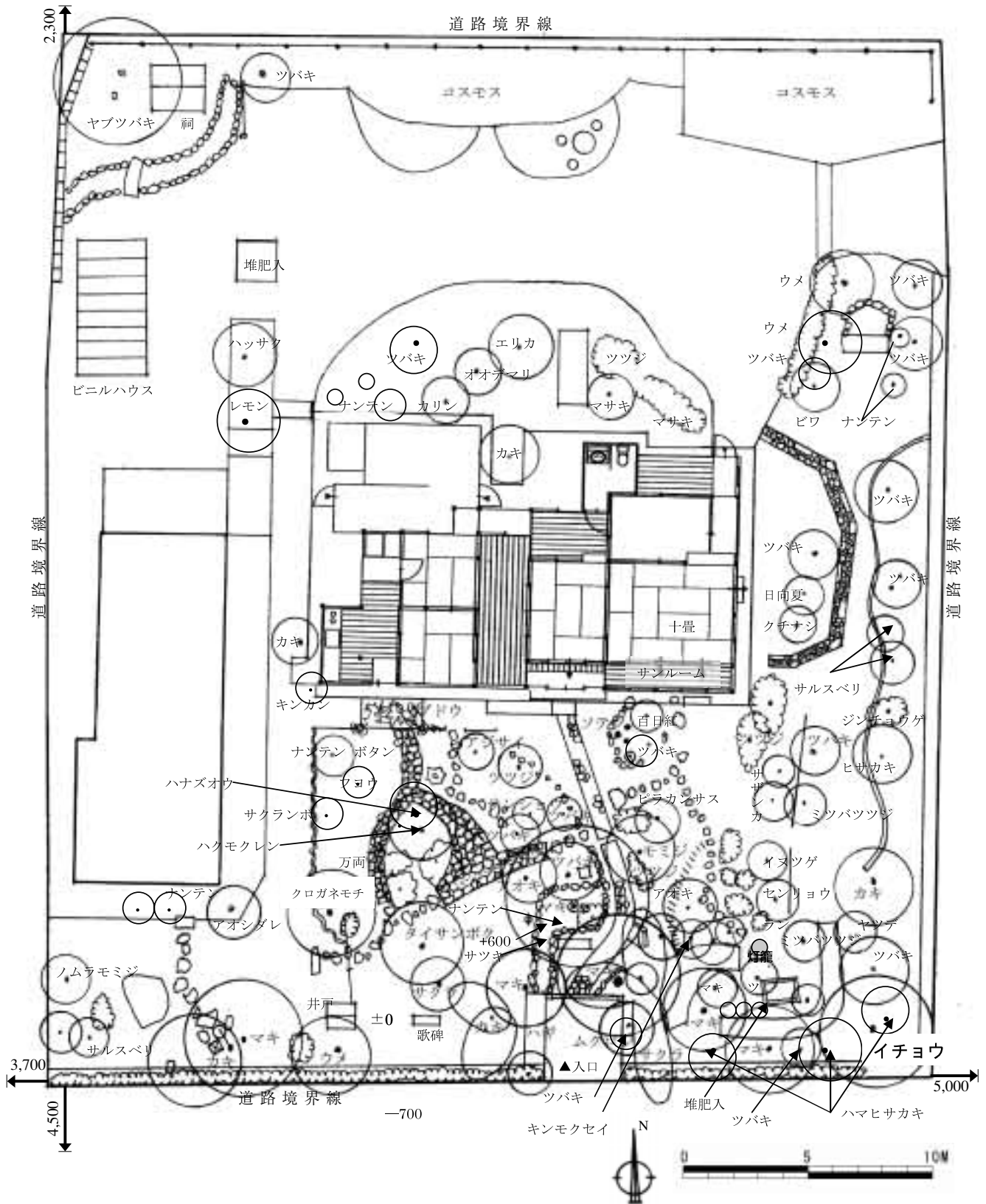


図1. 現在の安田家の住宅と庭 概念図 現地調査日 2009/7/28, 8/9, 10, 11, 12, 13, 26, 9/6

の南の庭の様子は写真6に示した。

(4) 十代目尚義 (1884-1974) の住宅と庭との関わり  
 4-(2) において、安田家の歴史概略として、初代

安田李仲が高鍋に招かれたころからの同家の歴史を見てきた。人と庭との関わりをイメージすることができるようになるのは十代目尚義 (1884-1974) 時代からである。尚義は、1884年にここで生まれ、長じて



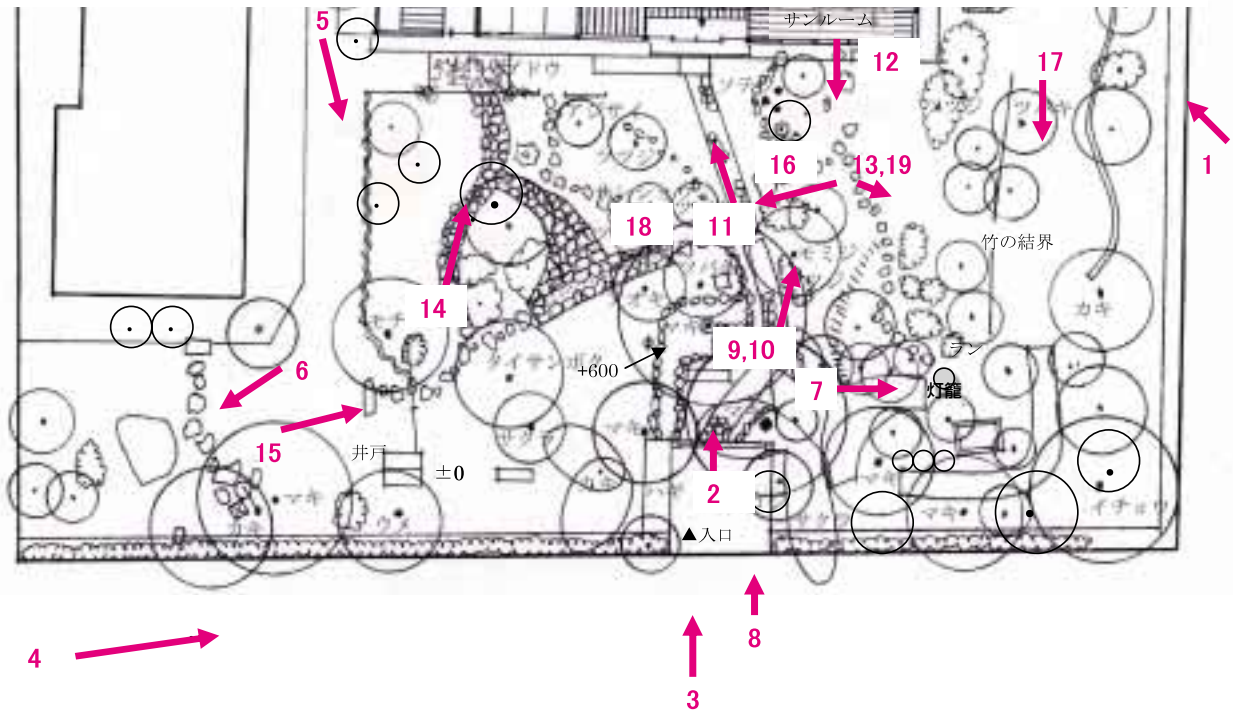


図2. 写真撮影箇所

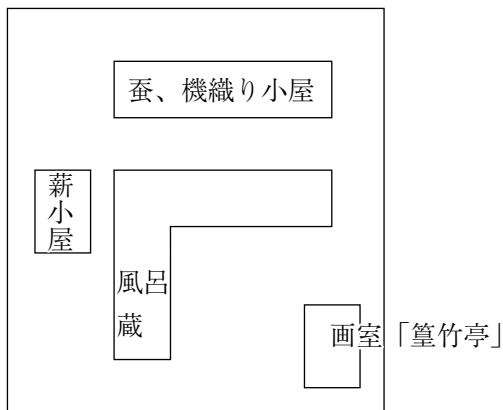


図3-1. 1935年以前の建築配置図

早稲田大学に学び、1907年の卒業と同時に函館商業学校に地理・歴史の教師として6年半赴任したが、1913年に目の病でいったん高鍋町に帰省した。1年間の静養後、鹿児島第一中学校の教員を勤めるが、1945年の四月に疎開をかねてこの地に帰郷し、八月に終戦を迎えた。以降郷里のこの地で生涯を送ることになる。歌の素養は、函館時代から積み上げたものがあったようである<sup>16)</sup>。1956年に出版された彼の歌集「尾鈴嶺（おすずね）」の中に書かれた、四賀光子氏のはしがき<sup>17)</sup>によれば、尚義は、「舊家の南縁」をガラス戸に変えて「サンルーム」にしたことが分かる。それは10畳の和室の南側の部分である（図1参照）。また四賀によれば、この庭に「門前の二本の榎の老木」があることか

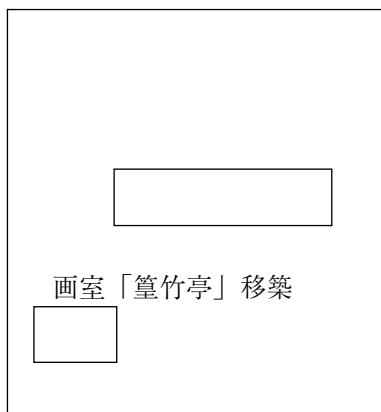


図3-2. 1935-1995年の建築配置図  
1995年に上記の画室を解体する

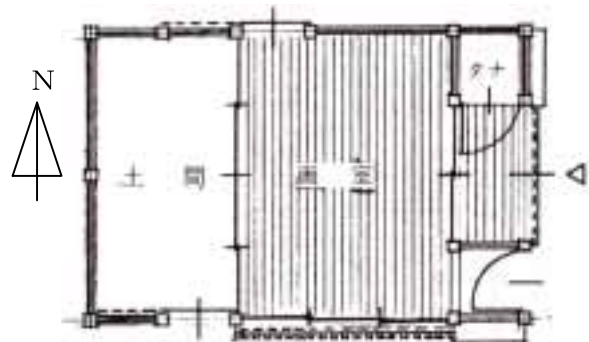


図4. 画室「篁竹亭」平面図

表1文献3より複写

同書では図3-2の配置のときの画室の写真も掲載している



図5. 十二代目安田進のスケッチブックより (17×23cm)

ら(図1の南側の門周辺を参照のこと。ここには現在6本の榎がある)着想して、尚義が住宅を「双榎居(そうしんきょ)」と名づけたことが示されている<sup>18)</sup>。終戦直前に郷里に帰ってきた尚義は、慣れないながらもここで農業を試みたことを歌に残している。

「農作に荒れたるわれの手のひらを  
すり合わすればからびし音す」  
「帰農せるわれに季節の贈り物  
前庭の柿後園の梨」

図1にあるように、住宅南に柿の木は数本現存する<sup>19)</sup>。一方住宅北側の梨はなくなってしまっている。梨は九代目が愛していたものだった。

「亡き父が遺愛の梨の熟れ早く  
今朝落ちたるをおどろきひろふ」

という歌がある。

サンルームからの景色を詠んだ歌がいくつかある。

「藤椅子に朝の陽ざしの親しまる  
百日紅の下葉黄に染まるころ」  
「満開の梅に梯子を掛けてある  
景を見てをりサンルームにて」  
「紅茶にレモンを入れて風の目を  
暖まりをりサンルームにて」

百日紅は、図1のサンルームのすぐ南に現存している。梅は確認することができない。これは梅の木に虫がついて枯れてしまったので、後にその場所に灯籠を設置したからである<sup>20)</sup>(写真7)。

尚義が庭に手を加えた記録もある。実のなる樹木を新たに植えたというものである。

「桃の苗木、栗の苗木を取り寄せて  
庭に植えみたり限りなきごとく」

祭りの日には、門前の桜の近辺に日章旗を立てていた。



写真6. ゲストハウスの南側の庭  
(2009年8月24日撮影) 敷石の間から水仙



写真7. 梅がなくなった後に置かれた灯籠  
(2009年12月23日撮影)

「落葉せし門のさくらに旗立てて  
神嘗祭今日は仕ふる」

この桜は南の門の横に現存する桜であろう。

十代目尚義は4人の子どもを授かった。そのうちの十一代目の捨男は1949年に郁子と結婚して子どもを二人授かった。1966年にその長男の十二代目進が庭の桜を描いた絵がある。それを図5に示した。この画賛は、当時中学3年生だった十二代目がこのお宅に鹿児島より遊びに来ていた時、敷地南の「馬場と呼んでいた入り口」にさしかかるサクラの枝を描いたものである。最初から祖父の尚義に短歌を書いてもらおうと右側に余白をあけて絵を描いたものだという。孫の要請に応じて十代目尚義が絵の右側に書いた短歌は、

「わが門の八重さくら花盛りにて  
孫の進が写生して居り」

というものであった。スケッチブックの日付は昭和41年3月19日となっている<sup>21)</sup>。庭のサクラを題材にお祖父さんと孫が交流した興味深い事例である。

十二代目の安田進によれば、十代目尚義の典型的な日課は、午前から午後までは和室10畳近辺(「サンルーム」のことか)でよくひなたぼっこをしたそうで



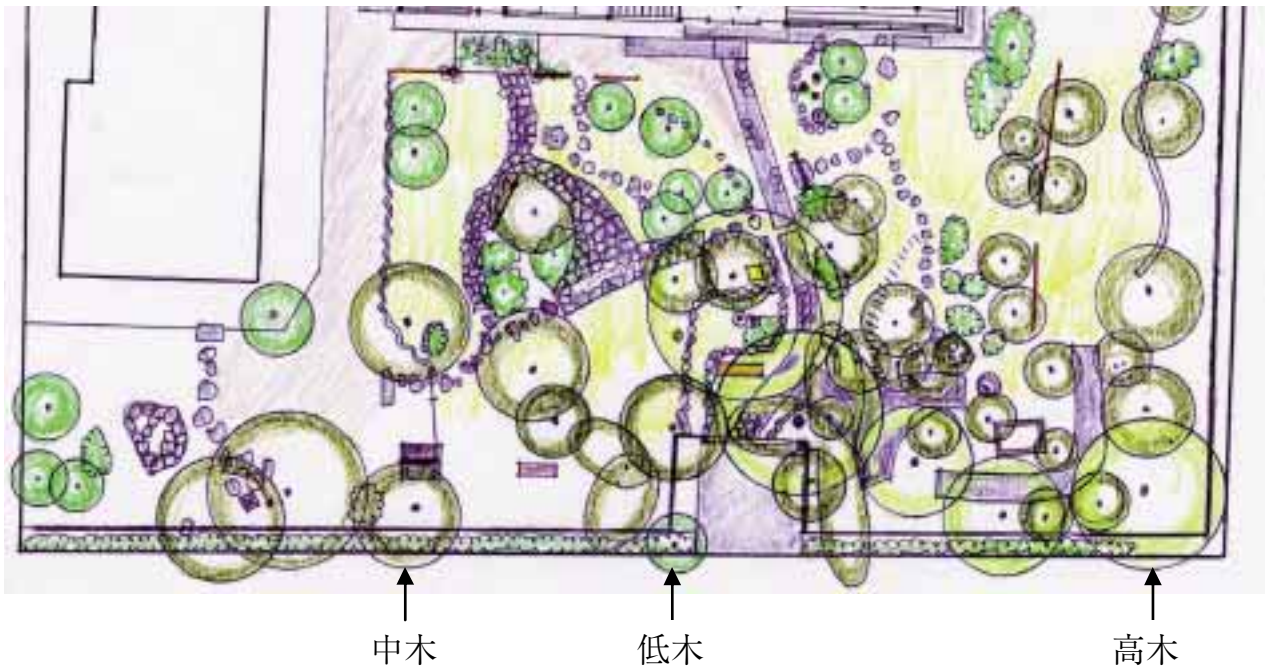


図6. 樹木の高さによる色分け 概略平面図に色鉛筆で着色

ある。サンルームの南側の庭は当時植物で鬱蒼としていた<sup>22)</sup>。尚義は縁側から下駄を履いてそのうっそうとした庭に出て行ったり、門と建物入り口を結ぶ園路を散歩したりした。そして弟子から送られてきた和歌の添削をしたり、歌を詠んだりしながら一日を過ごしたそうである。進氏曰く十代目尚義は歌人であったから、季節を感じて歌を詠む材料を探していたと言えるのではないかとのことであった。また、延べ段園路の西側の現在タイサンボクが生えている周辺は当時「何も無い、自然のまま」の空間で「歩くことができた」とのことであった。尚義にとってこの庭は歌の活動を安心して行える一種の隠れ家のような趣きをもつ場所で、彼の歌の創作空間である和室を包み込んでくれ、息抜きができるような場所だったのではないか。

#### (5) 十一代目捨男の庭との関わり

十代目尚義は、1974年自伝をかねた書「度々集(けんけんしゅう)」を出版した年に他界した。1977年に十一代目安田捨男夫人の郁子氏が、翌年捨男氏が横浜よりこの家に移り住むことになった。1984年に尚義生誕100周年を祝う会が催されることになった。そのとき尚義の歌の弟子がこの家にやってくるようになった。それ以前は縁側(尚義は「サンルーム」と呼んでいた)の南に飛び石は配置されていなかったそうである。歩かためというより、景色をつくるために十一代目の捨男・郁子夫妻がいっしょに飛び石のみちを作ったそうである。石を並べて見たところ山から掘り出した石の色が赤くて違和感があったので、庭師からアドバイスをもらい二人で石に墨汁を塗って黒くしたそうである。現在ではその飛び石は黒いということもなく庭になじんでいる。

#### (6) 現在の住宅南の庭の構成

敷地南側の入り口の門をくぐると正面に槇の木の大きな木がある。この木の樹高は約7.6mである。門の右側にある槇は樹高が約9.5mである(写真8参照)。この周辺の樹木の高さを整理したものが図6である。門の正面の7.6mの槇は、石積みされ土留めされた段(GLから600mm高い)の上から生えている(写真2参照)。正面方向の視線はこの土留めの段とマキと左側のナンテンとサツキなどによって遮られている。すぐ右側のゆるやかに曲線を描く園路を道なりに進んでいく(写真9, 10)と住宅の玄関に到達する(写真11)。門を入った客は、マキ、サクラ、ムクロジ、モミジなどの木々の作り出す木陰の中を歩いていくことになる(写真9参照)。その木陰はとても心地よい。住宅の棟高は推定5.5mであり、敷地の南側から見るとその姿は樹木に覆われているかのような印象を受ける(写真3, 8参照)。図6は住宅南の庭の樹木の高さを3種類に色分けしたものである。

和室十畳に続くサンルームの南の庭は、十代目尚義のころは鬱蒼としていたということであったが<sup>23)</sup>、現在は写真12のようにやや開けた空間になっている。この開けた空間は日当たりがよいため雑草が茂りやすい環境であるが、家主は雑草をこまめに抜いて、増えたリンドウが広がっているところである。リンドウは10月、11月ごろが見ごろである。リンドウの花の時期が終わろうとしているところの様子を撮ったものが写真13である。

#### (7) 安田郁子の庭づくりと庭の管理

1977年からこの庭の管理に携わってきた郁子氏の略歴を述べる。郁子氏は1913年に宮崎市で生まれ、桜蔭女子工学院で機械製図を学んで卒業し、1943年中島飛



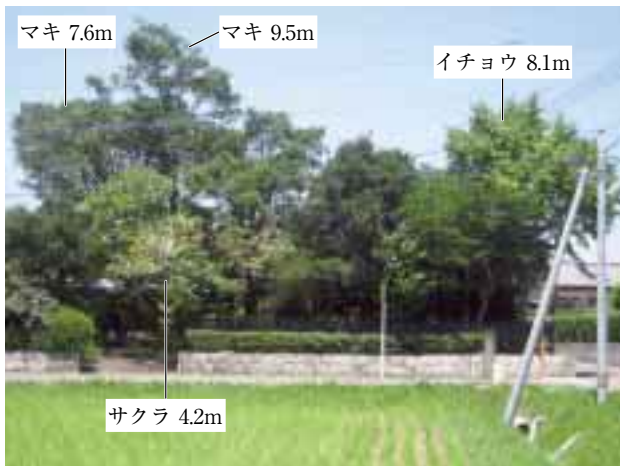


写真8. 門周辺拡大  
(2009年8月12日撮影)



写真11. 写真9の園路を進んだ玄関前  
(2009年7月23日撮影)



写真9. マキ樹高7.6mの右側園路から玄関までの道すがら  
(2009年7月23日撮影)



写真12. 10畳和室南のサンルームよりリンドウの庭を眺めた景色  
(2009年9月25日撮影)



写真10. 玄関に向かう園路の途中から右側植込みを見る  
(2009年12月23日撮影)  
写真9とほぼ同じ位置から写すピラカンサスとセンリョウの赤い実



写真13. リンドウが咲いている景色  
(2009年12月16日撮影)

行機小泉製作所に勤務した。そこで飛行機や震動計の設計をした。病気のため1944年に宮崎市にもどり、赤江海軍航空隊呉海軍施設理事生として勤務し、兵舎の設計をしたり線路などの土木製図や測量をしたりした。宮崎の海軍施設部にいた折、空襲や特攻隊員の出

撃を間近で経験した<sup>24)</sup>。終戦後横浜にしばらく住んでいた。1974年十代目尚義が死去し1975年に短歌の同人会「湖音」に入社し歌を詠むようになり<sup>25)</sup>、1977年にここに移り住むことになった。横浜から移り住んだときには庭が鬱蒼としており、雑草が腰の高さほどに伸

びるままになっていたもので、蛇も出そうであるしこのままでは住めないのではないかと思ひ、道をつけることにしたとのことである。この庭には「もともと木があっただけで何もなし」状態だったので「道すじをつけて両側（の手入れ？）をやっていく」ことを考えたという<sup>26)</sup>。それが表現されているものとして写真14, 15がある。郁子氏にとって庭造りでは、まず道をつくるということが大切だったようである。その視点でクロガネモチとハクモクレンの間の道を見ると、その道の西側にはあまり背が高くないが、季節に彩りをそえるナンテン、フヨウ、ボタン、サクランボ、マンリョウなどを植えた島がある（写真14, 15参照）。また住宅の玄関にいたる園路は途中で西に曲がる園路とぶつかる。（写真16参照）写真14の部分はまた、西側にあるゲストハウスの中の応接室の正面にあたるので、手前の植物の背丈が高くなって東奥の庭が見えなくならないように配慮しているようである。門を入った正面にある積み石・盛り土の部分は、もともと「何となくこんな感じ」だったが、武士の家の入口に行き止まりがあるという事例を知った上で、形を整えたという<sup>27)</sup>（写真2参照）。この庭の手入れや管理をする上で目指したものとして発言されたのは、「文人の庭という感じで作ってみたかった」ということであった。この感覚が表明された事例として、以前サンルーム南東部分に竹で結界を作ってほしいと庭師に依頼したとき、最初庭師が竹で一直線につくったところ、風情がないから二つに分けてほしいと伝えて今の結界が出来上がったといういきさつがある（写真17参照）<sup>28)</sup>。

この伝統あるお宅の庭の管理を行ってきた感慨に触れるものとして

「我は誰何する人ぞ何時よりか  
祖と繋がりて家守る人」  
「野りんだう守り逝きたる母を継ぎ  
今年も株も増えしと告ぐる」

という歌がある。庭との関わりの中でも雑草との格闘の中から生まれた歌が多くあるのでその中から抜粋して下に挙げる。

- 1) 「見渡せば葉先鋭どき雑草の  
我に眞向かふ家継ぎし庭」
- 2) 「草引きて月見草のみ残し居く  
眠れぬ夏の夜を偲びて」
- 3) 「無となりて小草抜きる日溜りを  
眞昼のサイレン一際高し」
- 4) 「秋草の枯れし姿も抜きがたし  
冬には冬の草生ふるにわ」
- 5) 「旅に居て労なき日々の味気なき  
友の庭草引きてうべなふ」
- 6) 「さやさやと風に吹かるる萩の花  
そこより生まれる秋の吾が庭」
- 7) 「夏の陽に休むことなく取りし草  
冬には冬の草生ふる庭」
- 8) 「石露とりんどう野菊咲き亂れ  
この一時の庭に憩へる」<sup>29)</sup>

などがある。雑草についてヒアリング調査を行ったとき、「草に負ける」ことのないよう、草取りを3段階で行っているという話があった。まず大きくなったもの

から引き抜く、さらに次くらいのを抜く、そしてどんどん抜く、という3段階である。小さいうちは手で握りこぶしのような形を作り、その形を維持したまま土の上をこするようにして雑草を抜く。郁子氏はこれを「手櫛」と呼んでいたがその状態が写真18である。また大きいものを抜くときは写真19のようにして引き抜く。どれが雑草でどれが増やしたい植物かを分かっているならば小さな芽の段階で処理することができるという。写真12, 13のサンルーム南のリンドウは、いまでは辺り一面に花を咲かせるようになったが、最初3株あったリンドウを残して丁寧にまわりの雑草を抜いていき時間をかけて現在の姿にまで広がった。増やし方は「立ち入り禁止」にしたとも「放っておいただけ」であるとも言われた。またこれまでの管理のなかで、植物は、「大事にしているものと類似したものが生える」という認識をお持ちであった<sup>30)</sup>。

日本人らしい自然な庭を意識して庭づくりや管理をされていることが分かる言葉も聞かれた<sup>31)</sup>。郁子氏にとってこの庭は、上述の草抜きに表れているように生活の中で非常に多くの時間を過ごす場所である。

## （8）歌の中で植物を詠むこと

季節ごとに庭の植物や自然の変化に寄せて自らの感慨を歌に詠んでいくことは、その自然の景物を通じた記憶のネットワークができ、過去・現在・未来が一つに溶け合っていくことにつながるのではないかと私は考える。郁子氏が戦時中特攻兵を見送ったときには桜が満開だったらしいが、桜を主題にした次の五首の歌から当時の心境と桜から得られる印象に関してニュアンスの変化が出ているのを感じることができる。

「戦いの心の傷の癒ゆるなく  
櫻散る時きりきり痛む」  
「めぐり来る櫻花は清し若きまま  
逝きたる人に逢ふ心地する」  
「年毎に櫻散る季に別れあり  
再びの花に会う術もなき」  
「生家婚家共に大樹の門櫻  
花ふる中をわれは逝きたし」  
「梅が過ぎ櫻もゆきて緑なす  
庭におり立つ二羽の鳩」<sup>32)</sup>

桜を実際に見るときには、特定の場所や時間というものに関わるに違いないが、別の場所で別の時間に目にした桜を題材にしてさらに新しい歌を作っていくと、桜のイメージはどんどん豊かに育っていく。またこうした姿勢で庭の景物を歌に詠んでいくごとに現実の庭は、その人のイメージの世界の中で多くの意味を持つ、見所のある場所へと変貌していくのではないだろうか。そして、そういう多元的な意味が内包された庭からは、観る者にもおのずと多様なニュアンスが感じられるものになっていくのではないだろうか。

## 5. まとめ

（1）八代李仲時代に建てられた住宅の平面プランはL字型をしていたが、現在は長方形になっている。さ





写真14. クロガネモチとハクモクレンの間の道を北側に見る  
(2009年8月12日撮影) 左側の植込みの島にはコケが広がっている



写真17. 竹の結界 サンプルームの南東  
(2009年8月12日撮影)



写真15. ゲストハウス南の庭から  
(2009年12月23日撮影) クロガネモチの足元を見る



写真18. 手櫛で除去  
(2009年8月24日撮影)



写真16. 玄関に向かう園路の途中から西側に分岐する園路を見る  
(2009年12月23日撮影) 左の創作灯笼は夜灯りがつく



写真19. 雑草を引き抜く  
(2009年8月24日撮影)

らに明治時代に入って茅葺が瓦葺に変えられた。しかし、現在の住宅の柱や梁などの構造材は当初のものでできている。敷地西側にあった薪屋や北側にあった養蚕の小屋はなくなっている。江戸時代の画室は解体され、その代り敷地西側に新築された建物の中に茶室が

もうけられている。その建物の入口にかつての画室の名前である「篁竹亭」の名称が付けられている。庭は十代目のときは雑草が繁茂してうっそうとした様相を持っていたが現在は手入れが行き届いて雑草は見たところ気にならないほどに抑えられている。



(2) ヒアリング調査と文献調査から、庭の物理的現況や変化だけからは分からない情報が得られた。庭には実のなる樹木が植わっていたが十代目尚義はさらに植え足した。柿、梨はあったが新たに桃と栗を植えている。庭の中に、食べるという実用的な目的を満たす植物を取り入れているように思える。また和室10畳で仕事をしてサンルームにたたずむ時、庭は、尚義が静かな心でくつろげる環境を提供した場所だった。また歌の仕事の合間に出てきて散歩する場所であった。この庭はさらに、歌を書いてもらおうとして孫が余白を空けて庭の桜を描き、祖父に差し出してできた画賛の存在から、安田家の長い歴史があるからこそごく自然に可能となった世代間コミュニケーションを見ることができた。そのコミュニケーションを可能にしたのは庭の桜だった。またこの庭は飛び石を配置するために夫婦が一緒に作業した場所である。庭の管理の世代が変わったことで、庭に園路が作られ景物が置かれてハードな素材とソフトな素材が対照をなす庭に変わってきている。現在の庭を管理する上で、多大な時間をかけて丁寧に雑草を抜いてきたその時々場面が郁子の歌に詠まれていることが分かった。歌人が歌を詠むにあたって庭が存在していること、庭の管理を行っていることが、歌の世界に足のついた確かな深みを与えている。総じて管理の主体が変わったことによって庭のスタイルは変貌している。庭の現況とその状態にいたる経緯が明らかになってこそ、人とその空間の関係についてまとめる素地ができるのではないか。

## 要約

本論は、高鍋町内に残る古い武士の住宅である安田家の住宅と庭の現況といまにいたるまでの経緯を調査し、そこに住む人と庭空間の関係性について明らかにしている。調査は現地測量調査、ヒアリング調査、文献調査を行った。絵師である八代李仲が天保10年に建てた住宅はL字型の平面プランだったが現在では長方形になっている。かつて敷地内にあった建物が3棟なくなっていたが新しく茶室兼ゲストハウスが建っていた。十代目のときの庭は食用にできる実の成る樹木が多く取り入れられたうっそうとした要素のある庭であった。現在の庭は雑草を日々抜き取って丹誠に管理してある庭となっている。十代目からは歌人が住むことになって、庭はその歌の創作に役立つ場所になっている。十代目のときは歌の活動を静かな心でできるような外の世界から仕事場を保護するような機能を庭は備えており、現在では家主が日々雑草と格闘しながら自然や人生について思いをめぐらしたり歌に詠んだりする対象となっている。

## 謝辞

調査にあたって研究室の大福望、岡田一晃、清水農、谷口知明の諸氏に協力をお願いしました。樹木調査では徳原隆先生にお世話になりました。ヒアリング調査

では安田郁子氏、進氏からお話を伺うことができました。記して謝します。

## 補註

- 1) 浅野伸子：宮崎県高鍋町旧武家地における家屋平面の変化について、日本建築学会九州支部研究報告、2004年3月、501-504。
- 2) 高鍋町教育委員会：高鍋町の武家屋敷と民家<高鍋の文化財第七集>、1988、3月。表1 文献3に該当。
- 3) 同調査では建築年代については「少なくとも明治〇〇年以前に建てられたものであろう」というような記述がなされているものが多い。そういう記述の場合は、表示された年代よりもかなり古いものとして建築年代をとらえることができてしまう。
- 4) 黒水家住宅は高鍋町が管理していたが、2007年からその地域（黒谷）の高齢者部が町から管理を請負って、来場者への説明、低木の剪定、掃き掃除などを行っている。
- 5) ヒアリング調査の殆どは安田郁子氏を対象に行った。2009年7月に3回、8月に4回、9月に2回行った。安田進氏へのヒアリングは8月に2回とメールで行った。
- 6) 写真に写っている敷地東側の石垣は江戸期の石垣で、南側の石垣は大正時代のもので、門を入った正面にある石積み（写真2）は江戸時代の石垣の石を使って積み石をしたものである。これは、区画整理に当たって当該敷地の南側の一部が縮小されたことによる。安田進氏からのヒアリング調査8月5日より。
- 7) 歌碑の文字は風化して読めなかったが、後に家主に聞くと同じものが高鍋農業高校の敷地内にあるとのことであった。確認に行ってみると「郷土の歌人 安田尚義」とあり、「尾鈴山ひとつあるゆゑ 黒髪は白くなるまで 國恋ひにけり」の句が石に刻んであった。尾鈴山は高鍋町から臨むことができる約1400mの山である。
- 8) この文とその前2つの文の史実の資料は表1の文献2である。安田守世の代に建てられた建物は、黒水家住宅と同じくもともとは茅葺屋根だったが現在は瓦葺の屋根である。これについてはヒアリング調査によれば、明治に入って廃藩置県が行われたあと瓦葺に変えられたのではないかとのことである。それ以前は藩主よりも格の高い家には住めなかったのではないかとのことである。
- 9) 表1 文献5、p.285。
- 10) 前掲書2) p.16より。
- 11) 安田進氏からのヒアリング（2009年8月5日）と同氏からのメール（2010年1月26日）より。
- 12) 安田尚義の句に「蠶餉ひしてわれを都に学ばせ

し母の労苦をいつまでも偲ぶ」という歌がある。安田尚義：尾鈴嶺，第二書房，1956年，P.144。加えて安田郁子氏へのヒアリング調査から，現在の居宅の北側には蚕を飼育したり機織をしたりした小屋があったことが分かったので図3-1に記載した。郁子氏によるとこうした仕事は当時の女性の仕事だったということだったが，それは尚義の上の句の内容と一致する。

- 13) 安田郁子氏へのヒアリング12月24日より。
- 14) 安田進氏のメール（2009年8月26日）に，「今の門は昔の柱を，廃屋を解体した10年前に持ってきて作ったもので子どものときにはもちろん門はありません。」とあったことから推測した。
- 15) ヒアリング調査によると，このイチョウの由来は以下の通りである。以前，敷地の西方にある金比羅神社の近辺に宮司が住んでいたが，その家を取り壊されることになった。その宮司の家の庭にあったイチョウを，画室を西側に移築したために空いていた安田邸の敷地南東隅に移植したとのことである。安田進氏へのヒアリング調査8月5日より。
- 16) これらの尚義に関する情報は表1の文献6に拠っている。同書には大学時代から同郷の若山牧水と交流があったと記されている。
- 17) 表1 文献1, p.9. ここで，潮音社の四賀光子（歌人大田水穂氏の夫人）が鎌倉で書いた同書のはしがき文には，「元禄時代から住まって居られるという舊家の南縁をガラス戸に改装して…」と書いてある。元禄時代は1688年から1703年までの間を言うから，ヒアリング調査での安田家の方々の話（天保10年）とは年代がずれる。
- 18) 安田郁子氏の話によれば，榎の木は尚義の小さい頃からあり，樹齢は200年にはなるであろうとのことであった。安田家で榎と呼んでいるのはイヌマキのことである。2009年7月10日ヒアリング。現在の敷地の右側の門柱の足元に「双榎居」の石碑が置いてある。写真2の右下を参照。
- 19) 柿の木は1963年ごろには17本あったそうである。郁子氏へのヒアリング調査7月10日による。
- 20) 安田郁子氏 7月10日のヒアリングにて，写真12の左奥の日陰になっている部分にかつて梅が生えていたが，虫が入って枯れてしまった。現在はそこに灯籠が置いてある（写真7参照）。
- 21) 安田進氏のメール8月26日。「祖父は私がサクラを

書いている間中，いつもどおり縁側の籐椅子で手紙かなにかを読んでいましたが，ここになんでもいいから書いてくれとたのんだら，しばらくしてできたからということではばれました。そのとき祖父は何もいわずに渡してくれました。」

- 22) 安田進氏からのヒアリング 2009年8月5日より。本文のこれ以降の4つの文までの内容はこの日のヒアリングからまとめている。
- 23) 10代目尚義は草をほとんど取らない人であったらしい。8月4日郁子氏への電話ヒアリングより。客間の南は，草で「真っ暗」だったという表現もされた。郁子氏への8月10日ヒアリング調査より。
- 24) これ以前の郁子氏の略歴は表1 文献4 pp31-89からまとめた。このときの思いを詠んだ句として，「戦ひの心の傷の癒ゆるなく櫻散るとききりきり痛む」という句がある。若い青年が特攻隊で戦地に出かけていったときは，ちょうど桜がきれいに咲いていた時期であったということであった。現在語り部としてご自身の戦争体験を人々に伝えている。
- 25) 表1 文献8, p.158.
- 26) 安田郁子氏ヒアリング調査8月24日より。
- 27) 沖縄の住宅に見られるひんぶんのイメージが入り込んだのだろうか。
- 28) 安田郁子氏ヒアリング調査8月10日より。
- 29) 全て表1の文献8からの抜粋である。
- 30) 庭で大切にしているハハコグサやリンドウと似た植物が生えることを指摘しておられた。ヒアリング調査 8月10日。
- 31) 「(いま流行っている) 日本のガーデニングは面白くない。」「直線とか，日本人にはおもしろくない」という言葉がある。またお持ちの本にターシャ・テューダーの本があったので訊ねると，「いいなあー」と思って「気楽にながめている」とのことであった。「自然を大切にする」というところで「通じるところがある」とのことです。「作ったという感じ」や「気取った感じ」がないところに注目しておられた。ご自身の庭づくりは，「自然のままですよ」「あったものを利用しただけ」ということであった。郁子氏ヒアリング調査 8月24日，9月21日。
- 32) 表1 文献8より抜粋。